〔入門講座〕

音　韻　論　（二）

服　部　四　郎

目　次

はしがき
一　室町時代末期の日本語の／ɸ／が摩擦的軟か音だったと推定されることについて
二　音素の内容について
三　「すきま」と「あきま」について
四　室町時代末期の「チ」「ツ」「ヂ」「ヅ」の音価について
　また現代日本語の「チ」「ツ」の音韻論的解釈について
　註1——28

はしがき

最初の予定では、「音素」については第一回分に書いた程度ですませ、「音節」「モーラ」「アクセント素」などについて私見を述べるつもりであった。ところが、音素に関して公にした私の意見に対して、亀井孝さんや浜田敦さんから批評が出ている。（ほかにも出ているのかも知れないが、まだ目にふれない。）それには、生ずるかも知れないと予想していた誤解も含まれているが、全く予期しなかったような誤解も少なくない。それで、それらの諸点について私の考えを敷衍して詳しく説明したいと思うし、その後私の考えも進歩した点があるのでそれらの点についても述べておきたい。議論が専門的になるように見えても、その方が結局入門講座の主旨に適うと思う。

一　室町時代末期の日本語の／ɸ／が摩擦的軟か音だったと推定されることについて

亀井さんの批評は、国学院大学国語研究会発行の「国語研究」第二号及び第三号（以下夫々「国二」「国三」と略記する）の拙稿の一部分に対するもので、同じく「国語研究」第三号に掲載されている。

まず第一に、室町時代末期頃の日本語（京都方言を中心とする

標準語、以下同様）では、その子音体系の一部に

/b　d　g/

/ɸ　t　k/

という相関関係があり、このほかに[p]もあったが、これはまだ音素体系の「すきま」にはいるような単音であったと思う、という私の意見に対して、亀井さんは次のように書いて居られる。

> 室町時代末期の子音組織における有声無声の対立の組織において、つぎの範例の□の位置を占めるのは /ɸ/ であるということ、
>
> g　d　b
>
> k　t　□
>
> つまり、/b/ の相棒は /ɸ/ であるということ、この点については、はじめから、教授とわたくしの間に異論はないのである。（国三58頁）

と述べて、それに対立する意見として、[ɸ]が摩擦音なので）右の□を空位（即ち私のいう「あきま」）と見ようとするらしい浜田敦さん等の説を註に挙げて居られる。亀井さんの説と私のそれとは外見は類似しているが、果して同一であろうか。その点を検討しよう。

私は、右のような「相関関係」があったものと推定し、かつ右の諸子音音素に共通の特徴は「軟か音性」(mellowness)であるのに対し、/s，z/ に共通の特徴は「きしみ音性」(stridency)であった、と推定した。（国二42、三54 55）。

然るに、亀井さんは、五十九頁から六十一頁にかけて書いて居られる所を見ると、/ɸ/ は mellow（軟か音）であると同時に continuant（摩擦音）であった、/b/ は mellow であると同時に interrupted（破裂音）であったと考えて居られると認められるが、六十一頁では、「/t/ /d/ と /s/ /z/ の対立は、もっぱら interrupted か continuant かの相関関係に求められることとなる。」と述べ、次いで康遇聖の捷解新語の表音法などから、「mellowness は[ɸ]の属性ではあっても /ɸ/ にとっては、irrelevant であるから、それで結合関係において、大きく変異したものと解される。それに反し、continuousness が一貫して十分に認められたらうことは、外国人達のうけとり方を通じて窺ふことができると思ふ。」と推定して居られる(国三63)。

この最後の推定に対しては意見（後述）があるが、それはともかく、まず第一に注意しなければならないのは、亀井さんは「相関関係」という術語を私とは違った意味に用いられるらしいことである(国三61頁4行以下)。私のいう「相関関係」とはプラーグ学派などの Korrelation のことである。私が、右に示したような相関関係があったと推定することは、これらの音素が、弁別的特徴の点で、「/b/ と /ɸ/ との違いは /d/ と /t/ との違いに等しく、更に /g/ と /k/ との違いに等しい」という関係にあったと推定することを意味する一方、私は、後に述べるように、/t/ /d/ と /s/ /z/ との二つの類は弁別的特徴として少なくとも軟か音性対きしみ音性を有したと推定したのに対し、亀井さんは、/t/ /d/ と /s/ /z/ との対立はもっぱら(1) interrupted と continuant との対立であったと考えられるのだし、また /ɸ/ は continuant であったのに対し /b/ は少なくとも interrupted であった(2) と考えられるのだから、これらの諸音

素は、ここに問題とした弁別的特徴及び有声（voiced）対無声（voiceless）の弁別的特徴の点で次のような関係に立つものと、考えて居られることとなる。（/k/ /g/ も interrupted であったとお考えのものとして(3)）

	/b/	/ɸ/	/d/	/t/	/g/	/k/	/z/	/s/
interrupted	+	−	+	−	+	−	−	−
continuant	−	+	−	+	−	+	+	+
voiced	+	−	+	−	+	−	+	−
voiceless	−	+	−	+	−	+	−	+

そうすると、もうこれだけでも /ɸ/ はその他の音素が立つ相関関係から、はずれなければならないこととなる(4)。これに反し私は、これらの音素は

	/b/	/ɸ/	/d/	/t/	/g/	/k/	/z/	/s/
mellow	+	+	+	+	+	+	−	−
strident	−	+	+	+	+	+	−	−
voiced	+	+	−	+	−	+	−	+
voiceless	−	+	−	+	−	+	−	+

のような特徴を有したと推定したのだから、

/b/　/d/　/g/

/ɸ/　/t/　/k/

という相関関係があったと推定する(5)ことが可能であったわけである。

右の推定は過去の言語に関することだから、直接的観察によって確かめることはできないが、現代日本語（東京、京都などの方言、以下すべて同様）における状態が参考となる。ここでは、

/b/　/d/　/g/

/p/　/t/　/k/

という相関関係が認められ、これらの諸音素に共通の特徴――それが /d/　/t/ のみにとって弁別的であるとしても――は軟か音性で、/z/ /s/ に共通のきしみ音性に対している。なぜなら /d/ は破裂的軟か音だが、発話の頭位で /z/ に該当する単音は、東京方言などでは摩擦的きしみ音ではなくて、破擦音即ち破裂的きしみ音だから、/d/ 対 /z/ の弁別的特徴は軟か音性対きしみ音性であると考えられるし、また、母音間で /b/ /g/ に該当する単音は、破裂音でなく摩擦音が自然な発音の目標(6)となっているものもあるので、それらすべてに共通の特徴は破裂音性ではなく軟か音性であると考えられるからである。

現代日本語の有力な中央諸方言において右のようだから、室町時代末期の日本語でも /b, d, t, g, k/ に共通の特徴は軟か音性で /z, s/ に共通のそれはきしみ音性であった蓋然性が大きい。その上に更に /d/ /t/ は破裂音で /z/ /s/ は摩擦音であっただろう。

従って、/ɸ/ が /b/ に対立する無声音として、右の諸音素と前述（本論文40頁）の相関関係にあったものとすれば、相関関係に立つ諸音素は、弁別的特徴以外の特徴をも共有することが多いから、/ɸ/ は軟か音性の特徴を有していた蓋然性が大きい。しかもポルトガル人が p でなく f を用いて表記しているのだから破裂音ではなく摩擦音だったと推定しなければならない。従って、自然な発音では恐らく摩擦音 [ɸ] が目標となっていた所の軟か音であったと推定することは理由のないことではない。

それでは摩擦的軟か音(7)とはどんな音か。私の考える所では、たとえば、「アバレル」をこくなまくらに弱く発音すると [b]

の代りに現れる[β]がそれであって、摩擦音という印象はむしろ稀薄で、ややもすると弱い[ɒ]のように聞えるような音である。調音の点からいうと、両唇が[β]のためのせばめを保つことがほとんどなく、閉鎖こそないが、唇が速かに解放される点が[ɒ]に似ている。即ち継続音ではなくて、わたり音である。摩擦的軟か音[ɸ]とはそのような[β]に対応する無声音のことである。[p]が弱まるとこの種の音となるわけで、日本語において起った/p/→/h/という音韻変化の過程においてこの種の音が現れた蓋然性は極めて大きい。琉球方言のうちに、この種の両唇音を有するものがある(8)。

さて、亀井さんの引用して居られる捷解新語の表音法は、右の私の仮説にとって有利な資料でこそあれ、その反証となるものではない。即ち/ɸi/, /ɸe/では母音の影響で口角が左右に引かれるから、その[ɸ]は、[ɸ]や[f]のない朝鮮人(9)には即ち[pi]に聞える可能性が多く、/ɸa/, /ɸo/では広い母音の影響で[ɸ]が一層ゆるむ傾向が著しかった(10)だろうから卦文と表記したのだろうし、朝鮮語の本の/h/は母音の影響で[w]或いは[ɸ]に近い音であっただろうから、日本語の/ɸu/を朝鮮人が自己の/hu/と同一視したのは極めて自然のことである。

私が、「言いかえれば/ɸ/ははっきりしたcontinuant【この場合「継続音」の意味に使った】ではなかっただろうとするのが、実は私の説のミソなのである。」(国三55頁3行)と書いた意味は、右に説明した通りだったのである。

二　音素の内容について

さて、右にしばしば言及した「音素の弁別的特徴」について考察する必要がある。

「国語学、第二十二輯」の拙稿では、実用的目的から、音素を仮定する手順について主として述べた。音素という単位を仮定しなければならないことについては諸学者の意見が一致しているにもかかわらず、音素そのものの定義となると、意見が色々にわかれる。それらについて概観することがこの際必要になってきたし、またそうすることは入門講座の主旨にも反しないと思う。

音素に関する学説のうちで、最も異色のあるのはLouis Hjelmslevの説で、音素はsubstance(「実質」即ち、この場合「音声」)とは関係のない単位であるとする。これはde Saussure (*Cours.* p. 164)の「音素は何よりもまず対立的、相対的、消極的実在体である」という思想の影響によるものだが、de Saussure自身は、音素が音声とは全く無関係のものだとは必ずしも考えていないようだから、de Saussureの学説の一面的な解釈にもとづくものとしなければならない(11)。事実、音素にはHjelmslevの指摘するような機能があり、さればこそそれは全く恣意的な字母で代表され得るのだが、音素のこの機能のみに注意していると、音素の構造、音素のなす体系を、十分明かにし得ないことになる。

W. Freeman Twaddellは、「実質」(即ち彼の場合、「調音」)の観察から始めるが、結論においてはHjelmslevの学説に近いものとなり、「音素は消極的、関係的、差別的、抽象概念である。」「現れるのは音素ではなくて、micro-phonemeに関連づけられた音声

的断片、或いは差別された調音複合体である。」としている(12)。しかしながら、実質の観察から始まっただけあって、彼の学説には、後に述べる「弁別的特徴」と関連のある思想も含まれている。

これらの説に対して対蹠的な地位に立つ学説として、音素は単音（音声的な単位）の一群であるとする説がある。その代表的なものとして、Daniel Jones の次の定義(13)を挙げることができる。「音素とは或言語における単音の一族（a family of sounds）のことで、それらの単音は性質において関連があり（related in character）、どの一つの成員も他の成員が現れるのと同じ音声的脈絡（phonetic context）において一つの単語に現れることがないように用いられる。」この説によると、単音そのものが集まって音素をなすのだから、単音に含まれる弁別的特徴は勿論、非弁別的な余分の特徴も、音素に属することとなる。

アメリカの学界で有力な「phones の一つの類（class）が音素（phoneme）である」という思想は、結局において、右の Jones の説と同一であるということができる。なぜなら、phone とは私のいう「単音」乃至は「単音族」(14)のことであるから。そして、それらの phones を allophones と呼び、それらは「音声的に類似している」という条件がついているのが普通(15)だが、類似の程度に関する規準が示されていない点でも、Jones がただ「性質において関連があり」と定義しているのと類似している。この点がぼんやりしているのが、これらの説の大きい欠陥であると思う(16)。

同じく客観的な音声と関係づける定義ではあるが、右の説と対立するとされるものに、Leonard Bloomfield のそれがある(17)。即ち「そこで、どの発話の総体的な音響的諸特徴（gross acoustic features）の中においても、そのうちの或特徴は弁別的（distinctive）であって、相続く発話において、認知し得るところの相対的に一定した形において繰返し現れる。これらの弁別的特徴は塊り或いは束となって現れるが、その各々を我々は音素と呼ぶ。」と。この説に従えば、単音の全体ではなく、それに含まれている弁別的特徴のみが音素に属することとなる。これに対して、W. F. Twaddell は「現在における唯一の合理的結論は、音波の中に、積極的にして加えうる存在者（positive, additive entities）としての『音素特徴』（phoneme-features）が存在するということは証明できないし、未来において証明されるであろうと信ずべき理由もないということである。」と批評した。

ところが、この「弁別的特徴」の音響学的性質その他が、Roman Jakobson 教授らによって明かにされつつある。そして、この進行しつつある研究の予報（*Preliminaries.* 本論文注3参照）が既に発表されている。同教授はこの予報（第二刷）の三頁で、「弁別的特徴が結合して一つの同時的（simultaneous）――Twaddell の適切な表現を用いれば『同時に現れる（concurrent）』――束になったものが音素を形成する。」と定義している。この表現そのものは、「音素は弁別的特徴の同時的束である」という定義と必ずしも同一視することはできないようだが、雑誌 *Language*（Vol. 29, No. 1, 1953, p. 34）でも教授は L. Bloomfield の右の定義を引用して居り、他の場所でも(18)、同一音素に該当するすべての単音に「共通の弁別的特徴の束」を音素と見做しているから、教授らの定義は Bloomfield のそれと同じであると見てよいと思う(19)。

「弁別的特徴」とは、教授に従えば、単独には存在しないもので、二つの項(而も二つ以上ではない)の対立によって成立する。たとえば、「有声性」或いは「無声性」そのものが弁別的特徴なのではなく、「有声性対無声性」が一組の弁別的特徴をなすのである。従って、それは絶対的なものではなくて、相対的なものである、という(20)。

教授の説において特に注意すべき点は、世界の諸言語に見出される音素体系の種類はきわめて多いけれども、それを成立させている弁別的特徴の種類は少なく(21)、各言語においてそれらのうちのいくつかが色々に組合さって種々の体系ができている、とする点である。教授らの実際に挙げている弁別的特徴そのものについては検討の余地があるとしても、右述の点はすばらしい着想であって、その影響範囲も非常に大きく、言語学を一層科学的とする希望を与えるものであると思う。

教授は、或単音の含むすべての特徴を、弁別的なものと余分のもの(redundant)とにわけ、前者のみが音素を形成すると考えているわけだが、単音が基礎となっていると言い得る点が注意される。

そして教授は「新しい情報を伝えない所のすべての余分の資料」を次々に除去して行くことにより、最善の音韻論的解釈に到達し得ると考えている(*Preliminaries*, p. 7)。しかし、この考え方には二つの点で問題がある。

第一に、或音声連続をいくつかの単音に分割し、その各々から余分の特徴を次々に除去して行くわけだが、その分割のしかたそのものに関して意見の不一致がおこり得るし、教授の手順はこの点に関する意見の非単一性を克服することができないのではないか(22)。

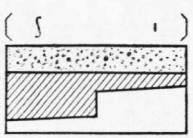
第二に、教授に従えば、「新しい情報を伝えない資料」はすべて余分の特徴であり、従って音素とは関係がないということになるが、音素は果して弁別的特徴のみの束であるかどうか。

右の第一の点について説明すると、たとえばシナ語北京方言には [i] [u] [y] [ɨ] [ʯ] などの狭母音があるが、これらの音韻論的解釈としては、

(1) /i/, /u/, /y/, /ɨ/, /ʯ/
(2) /i/, /u/, /iu/, /ɨ/, /ɨ/
(3) /ɨ/, /uɨ/, /iuɨ/, /ɨ/, /ʯ/

など、いろいろのものが考え得る(23)。そのうちのどれがよいかを決定するためには、前回に述べた「分布の原則」「構造の原則」によらなければならない。長い [y:] という母音は、音声的には一つの単音と認めざるを得ないであろう。

だから、私は、前回の**四・一**節に述べたように、或音声連続をいくつかの単音に分割し、その単音にもとづいて音素を帰納するというやり方は、厳密にいうとよくないと思う。上の図は日本語の [ɲɕi](シ)という音声に含まれている諸特徴を図形的に示したものである。点を施した部分は個人的な文体的な特徴で、それを除いた部分が音韻論で問題となる。右述の説に従うと、概略的にいって、単音 [ɲɕi] では斜線の部分のみが音素 /s/ の弁別的特徴で白く残し



た部分は余分の特徴であり、単音 [ɪ] では逆に白い部分のみが音素 /i/ の弁別的特徴で、斜線の部分は余分の特徴だということになる。

これに反し、既に前回に述べたように、私は、[jɪ] という音声連続の斜線の部分全体が音素 /s/ に該当し、白い部分全体が音素 /i/ に該当する、と考える。シナ語北京方言の [y:] を、私は /jui/ と解釈するが、この長母音の全持続を通じて舌はほぼ [i] の位置を保つのに、唇の円めは、ごく僅かおくれて始まり、ごく僅か早めにゆるめられる特徴が、それぞれ /i/ と /u/ とを指し示している、と解釈する。このように考えて来ると、単音の余分の特徴を次々に除去して行って残った弁別的特徴の束が音素であるとする考え方が、不適当である場合があり得ることが、わかるであろう。

次に、第二の点について論じよう。たとえば、教授に従えば、現代日本語の /p/ /b/ の軟か音性（それに該当する単音の多くに見出される破裂音性は勿論のこと）は、それらに対立する（摩擦的）きしみ音素がないから、弁別的特徴ではなくて余分の特徴だ、従って音素には属しない、ということになるに違いなく、ロシヤ語の /k/ /g/ の口音性（非鼻音性）は、それらに対立する鼻音音素が無いから、同様に余分の特徴だということになる（前掲の雑誌 Language, p. 38）。然るに、ロシヤ語の /t/ の軟か音性はそれに対するきしみ音音素 /c/（＝破擦音 [ts]）があるから弁別的特徴だが、/d/ の軟か音性はそれに対立する有声の破擦音音素がないから余分の特徴だということになりそうなのに、教授の説では弁別的特徴となっている（同雑誌38頁並びに40頁）。

これは或いは誤記であるかも知れないが(24)、深い意味を持っているように思う。即ち、「ロシヤ語の音素 /d/ は同じく音素 /t/ と軟か音性という特徴を共通に持っている」と表現したい事実が存するからこそ、こういうことが起るのではないか。同様に、現代日本語では /p, b; t, d; k, g/ に共通の軟か音性という特徴(25)がある、と表現したい事実が認められる。言いかえれば、これらの音素に該当する単音がきしみ音ではなくてすべて軟か音であるという事実が認められる。たとえば、/b/ はきしみ音であってもかまわないのに――実際 /b/ の代りに [v] を発音しても伝達の目的は達する――軟か音である。即ち、現代日本語の話し手は、きしみ音ではなく、少なくとも軟か音を発音することを目標として居る。このような特徴を「目標的特徴」と呼ぶことにしよう。弁別的特徴は勿論すべて目標的特徴であるが、目標的特徴は弁別的であるとは限らない。

「アブナイ」（危い）を明瞭に且つ自然に発音すると、「ブ」の子音が摩擦的軟か音となるが、「ア、ブ、ナ、イ」とモーラごとに強めの谷をおいた、明瞭だが丁寧過ぎて不自然な発音では「ブ」の子音が破裂音となる。この破裂音性の如きを「丁寧過ぎる目標的特徴」と呼ぶことにしよう。

普通の考え方では右述の目標的特徴である軟か音性をも音素 /b/ に属すると見做すと思うが（そして私もその説をとるが）、更に破裂音性のような丁寧すぎる目標的特徴もこれに属する、或いはそういう特徴こそ音素の属性であると見る学者がある。有坂博士の如きはその一人であろう。というよりも、博士にとっては、発音の（丁寧すぎる）目的観念が「音韻観念」である。

現代日本語の音素 /s/ は「浅音 (diffuse)」、明音 (acute)」、口腔音 (oral)」、きしみ音 (strident)」、無声音 (voiceless)」、摩擦音 (continuant)」の諸特徴を有する。いずれも目標的特徴である。然るに Jakobson 教授の説に従えば、このうち少なくとも「浅音」、明音」の諸特徴は弁別的でない、即ち余分の特徴である、ということになるのではないか。なぜなら、/s/ が /t/ に対立するように、/p/ や /k/ に対立する無声のきしみ音音素がないからである。しかし、右のすべての目標的特徴を音素 /s/ に属すると見做す方が普通の考え方であろう。

しかし、弁別的でない目標的特徴の或ものを音素に属しないとする見解がすぐれていると考えられる場合がある。たとえば、現代日本語の音素 /z/ に該当する単音は、東京方言などでは普通、発話の頭位では破擦音で、母音間では摩擦音だと概略的に言えるが、はっきりした発音ほど破擦音に近づき、モーラごとに強さの谷をおいた丁寧すぎる発音ではすべて破擦音となるから、本体は破擦音で、母音間でそれが弱まって摩擦音となると見ることができる。しかし、個人によっては摩擦音に傾いた発音をする者もあり方言によってはほとんど摩擦音の現れるものもあり、無限の中間的段階が存在し得る。だから、目標的特徴の破擦音性を音素に属すると認めて、/z/ を破擦音音素 /c/ に対立する有声音素とするよりも、この特徴を音素に属しないと認めて、/z/ は無声きしみ音音素 /s/ /c/ に対立する有声きしみ音音素とする方がよい、と考えられる。

前に述べたように、室町時代末期の日本語では、

/b/ /d/ /g/ /ɸ/ /t/ /k/

に共通の特徴は軟か音性であり、有声対無声の特徴でこれら六つの音素は右のような相関関係をなしていた、と推定される。そして、更に /ɸ/ だけが摩擦音性を目標的特徴とし、他は破裂音性を目標的特徴としていたと仮定する。そして、もしこれらの特徴もこれらの音素に属したとするならば、/ɸ/ のこの特徴は右の相関関係とは無関係ということとなる。/b/ /ɸ/ の軟か音性の如きを相関的目標的特徴、/ɸ/ のここに問題とした摩擦音性の如きを非相関的目標的特徴と呼ぶことにしよう。(非相関的特徴は音素に属しない、と見ることもできる。)このような非相関的目標的特徴は、隣接音の影響によるものではなく、自律的なものと認められる。なぜなら、他の五つの子音に同じ特徴が無い故、後続母音の影響によるものと説明することができないからである(26)。

このように考えて来ると、右述の色々な目標的特徴のどこまでを音素に属すると見るべきかは学者によって意見が異なり得る。それかと言って、「弁別的特徴」だけが音素に属するとするのも行き過ぎのように感ぜられる。どの程度にとどめるべきかは、将来の研究にまつべきであろう。現在採り得る最良の道は、色々の目標的特徴をはっきり区別して記述し、そのうちどれが弁別的特徴であるかを明瞭にしておくことである。

音素に該当する単音には、隣接音素の影響による特徴が加っていることがある(これは共時論的意味において言うのであって通時論的意味で言うのではない)。Jakobson 教授はこの種の特徴をも「余分の特徴」と呼んでいる。この特徴は、不明瞭な発音で著しくなり、明瞭な発音では少なくなること、言いかえれば、目標

的特徴でないこともあるが、明瞭で且つ自然な発音でも、更に丁寧すぎる発音でさえも、存在すること、言いかえれば、目標的特徴であることがある。例は非常に多い。たとえば、現代日本語の音素 /s/ の場合がそれで、/si/ の /s/ に該当する単音 [ʃ] は /i/ の影響で [i] の音色を持っているが、/sa, su, se, so/ の /s/ に該当する単音 [s] にはその音色がない。しかし、自然で明瞭な発音でも、丁寧すぎる発音でも、この両者（即ち [ʃ] と [s]）の差異は大きくこそなれ、小さくなることはない。勿論これは現代日本語の有力な諸方言において事実そうであるというに過ぎないのであって、音素 /s/ が /i/ の前にあればそれに該当する単音は必然的に [i] の音色を帯びなければならないと言うものではない。[si] という発音は可能であり、そのような発音を有する方言があっても、何ら異とするに足りない。この点は誤解しないようにして頂きたい。

このような隣接音素の影響による特徴は、その単音の該当する音素には属しないと考えることは、私も賛成である。

また、自然な発音では、如何に明瞭に発音しても、或音素に該当する単音が現れない（と表現してよい）ことがある。たとえば東京方言で、/suteru/（棄てる）、/siteru/（為てる）に該当する発音は、自然さを失わない限り [steru] [ʃteru] であって [s] と [ʃ] の次に無声化母音さえも現れない。ただ、明瞭な発音では [ʃ] がやや長く（一モーラ分の長さを有する）且つ漸強漸弱音である点が、それが単なる子音音素に該当するのではないことを暗示し、更に [i] の音色を含んでいることが、/i/ がそれに続いていることを暗示する。[steru] の [s] の場合も同様である。しかも現代日本語ではモーラが普通 CV という構造を有する故、また /t/ の前の /sa/, /se/, /so/, /sja/, /sjo/ に該当する音節には母音が現れ、/sju/ に対して [ʃ] が現れるとしても /u/ の音色を併せ有する故、右の [s] [ʃ] は間違いなく夫々 /su/, /si/ に該当すると認められるのである。このように、或音素（この場合 /u/ /i/）に該当する単音が現れなくても、隣接音素に該当する単音にその音素が与えた音色その他の影響によって、その存在が認知されると認め得る場合がある。いいかえれば、我々は [steru]（棄てる）、[s(u)na]（砂）、[subete]（総べて）などの [s] [s(u)] [su] を同一視する、即ち同一の音韻 /su/ に該当すると聞きとる習慣を有する。

このように考えて来ると、音韻論的考察においては、発音の習慣・発音される音声だけではなく、聞きとりの習慣をも研究しなければならないことがわかる。要するに、外に現れる客観的なものばかりではなく、我々の脳その他に確立しているものの研究が必要である。前回の三節で述べた所はこれと関係がある。

とはいえ、有坂博士のように、「音韻観念」だとか或いはそれを超越した「音韻」というものに言及するだけでは問題は解決しない。前回にも説いたように、内部観察をも軽視することなく、而もできるだけ客観的な方法により研究を進めなければならないと思う。たとえば、脳の中の活動は客観的方法によっては研究することができなかったが、脳波の研究方法の進歩は、我々に多くの希望を与えるように思う。

三　「すきま」と「あきま」について

さて、私のいう「すきま」と「あきま」の概念について考察する段どりとなった。

或音素に該当する諸単音の一部に、同じ音素に該当する他の諸単音にない特徴が隣接音素の影響によって加っている、と記述できる状態にある時、そこに「すきま」がある。たとえば、前述のように /si/ の / s / に該当する単音が [ʃ] で、/sa, su, se, so/ の / s / に該当する単音が [s] であるときには、/si/ に「すきま」があると言えるわけで、この「すきま」にはいる [si] という発音が生じ得る余地がある。

また或音素に該当する単音が非相関的目標的特徴を有する時もそこに「すきま」がある。そして、そのような特徴を有しない単音が、その「すきま」にはいる音として生じ得る余地がある。たとえば室町時代末期の日本語の / ɸ / に該当する単音が、前述の如き非相関的目標的特徴（摩擦音性）を有したとすれば、それを有しない [p] が「すきま」にはいる音として生じ得るわけである。私の推定が正しいとすれば、この「すきま」にはいってきた音 [p] は、/ ɸ / が、有声対無声の相関関係にある軟か音の体系内にあって / b / に対立する無声音音素の位置を占めている間は、[ɸ] とは別の音ではなくて、その強まった音であるように、話し手たちは感じたであろう（国二40 41頁の語例を見よ）。吉利支丹教徒たちはポルトガル語の / p / をまねするために多少気どってこの [p] を用いたであろう。しかし、/ ɸ / が更に弱まって軟か音性をさえ失い、/ h / になったか、それに近づいた時に、この [p] は / ɸ / の棄てた位置に音素 / p / として坐ることができた、と推定したのであった。/ ɸ / はおそらくきしみ音性を目標的特徴とする時代が一度もなかったであろう。

/ t /　/ s /

/ p /　/ ɸ /

という相関関係を形作るためには、ゲルマン語やシナ語におけるように、/ ɸ / は唇歯音の / f / に変化してきしみ音性を獲得しなければならなかったであろう。このような相関関係にある / f / は容易には / h / に変化しない。現代日本語で / h / に変化している事実から逆に、室町時代末期の f 音は / f / ではなくて / ɸ / であったと推定することさえできる。

「あきま」とは、相関関係にある諸音素のうちの一部分が欠けているか、相関関係にある諸モーラ或いは諸音節のうちの一部分が欠けている場合の、空位をいう。前者の例は、前述の / ɸ / が / h / に変化した後にできた空位がそれで、新しい音素 / p / はこの「あきま」にはいって来た音素である。後者の例は、現代日本語において /ti/「ティ」、/tu/「トゥ」、/di/「ディ」、/du/「ドゥ」などというモーラのはいり得る空位がそれである。

「あきま」には音韻的なものと語彙的なものとある。右にあげたのは音韻的あきまの例である。現代日本語東京方言などには /ka/《蚊》、/ki/《木》、/ku/《九》、/kɸ/《毛》、/ko/《子》、/sa/《差》、/si/《詩》、/su/《巣》、/se/《瀬、丈》などの単語があるのに /so/ という形の単語がない。しかし二モーラ以上の形式には頭位に /so/ というモーラを持つものが沢山ある。だから /so/ といの形の形式がないのは、ここに音韻的あきまがあるのではなくて、語彙的にここがあきまになっているに過ぎないのである。

四　室町時代末期の「チ」「ツ」「ヂ」「ヅ」の音価について
また現代日本語の「チ」「ツ」の音韻論的解釈について

最後に、私が、室町時代末期の日本語の「チ」「ツ」「ヂ」「ヅ」を /ti/, /tu/, /di/, /du/ と解釈し、それらの子音はきしみ音の破擦音ではなくて、破擦音に傾いたものであるにしても、破裂音が強く、摩擦音要素は弱く且つ比較的短い所の、軟かい音であっただろうと推定した(国二44)のに対し、亀井さんは二種類の文献を引用して、それらの子音が「はっきりした「きしみ」をもってゐたとみるのが穏当である。」と結論して居られる(国三62)。しかし、氏の挙げられた第一種の、ヤソ会版ローマ字文献は、私の引用したもの(国二43)と同じ綴りを示しているし、第二種の捷解新語(一六七六年の刊(原稿は一六一八年の頃に成ったという))も決定的な資料とは言いがたいので、これだけでは私の説を完全に撤回することはできないわけである。しかし、その後の方言調査などによって、私の音韻変化の可能性に関する考えが少し変って来た。即ち、私は

/ti, tu; di, du/ の子音が「軟かい音」から「きしみ音」に変化した時には、それらは /ci, cu; zi, zu/ となって /ta, te, to; da, de, do/ の子音音素 /t, d/ とは異なる子音音素 /c, z/ を有するようになって居り、かくして生じた /zi, zu/ は、以前から存した /za, zi, zu, ze, zo/ の /zi, zu/ と恐らく夫々合流していたであろう。(国二44)

と述べているが、これを言いかえれば、「チ」「ツ」「ヂ」「ヅ」の子音がきしみ音化して、「タ行音」と「ダ行音」に体系の変化が生じながら、「ヂ」と「ジ」、「ヅ」と「ズ」の音韻的区別が保たれていた蓋然性は非常に少ない、即ちこの音韻の混同と「チ」「ツ」「ヂ」「ヅ」の子音の完全な破擦音化とが互に無関係のできごとではないのではないか、というのが、私の説のミソだったわけである。しかし、その後の研究の結果、発音上の(通時的)変化は音韻体系の一部を比較的容易にこわし、その結果生じた不均斉さが過渡期においては案外平気で保たれているものらしい、と考えるようになった。だから、室町時代末期においても、「チ」「ツ」「ヂ」「ヅ」の子音音素が破裂的きしみ音即ち破擦音音素になっていながら、摩擦的きしみ音音素 /s/ /z/ とは異なる音素であった蓋然性もあると考えるようになった。

亀井さんはまた、室町時代末期の「チ」「ヂ」「ツ」「ヅ」の子音は「はっきりした strident stop に発達してゐた」と推定されるにもかかわらず、それらが夫々 /t/ /d/ に該当したと解釈し、同時代の「/t/ および /d/ は、「きしみ」の機能には無関心の interrupted であったと解される」と説き(国61)、同じく「タ行音」と「ダ行音」とを

/ta ti tu te to/
/da di du de do/

と解釈し、「ここでは [t] と [ŝ] と [ĉ]【即ち夫々破擦音 [ts] と [tʃ]】のくひちがひが無効になってゐる。」と主張して居られる(国64)。

現代日本語の「タ行音子音」をすべて同一の音素 /t/ に該当すると解釈する学者は日本にも西洋にも案外多い。R. Jakobson

教授が、

> 他の言語では、両方の対立【即ち、きしみ音対軟か音、摩擦音対破裂音】が融合していて、もし破裂音素の或ものが少なくとも或条件の下に破擦音によって代表されていると、きしみ音性が余分のものとなることがある。(*Preliminaries*, p.25)

と書いているのも、現代日本語の「タ行音」などのことを暗示したもののようにとれる。しかし、既に述べたように、現代日本語の /d/ と /z/ との対立は破裂音と摩擦音との対立ではなく、軟か音ときしみ音の対立であり、/b/ /g/ に該当する単音は母音間では屢々摩擦音である点などを考慮に入れると /b, d, g; p, t, k/ に共通の特徴は軟か音性であると考えられ、「チ」「ツ」「チャ」「チュ」「チョ」の子音はきしみ音の破擦音たからこの系列からはずれた破擦音音素 /c/ に該当するものと認められる。Jakobson 教授はしかし次のように考えているのかも知れない。即ち、「日本語の /b, d, g/ に共通の特徴は軟か音性だけれども、/p, t, k/ に共通の特徴は軟か音性と破裂音性との融合したもので、/ti/, /tu/ などの /t/ に該当する子音は破擦音即ち破裂的きしみ音たけれども、そのきしみ音性は余分の特徴である。なぜなら、このきしみ音性はそれがあることによって何らの新しい情報を伝えないから。更にくだけて言えば、「チ」[t i]、「ツ」[tsɯ] の代りに [ti] [tu] と発音しても誤解されることはない。」と。しかしながら、言語の音韻的構造を研究しようとする私などはそれでは首肯することができない。まず第一に、/ta, te, to/ の /t/ の弁別的特徴は軟か音性と破裂音性との融合したもので、/ti, tu/の /t/ のそれは破裂音性だけだとするのはおかしいから、/t/の弁別的特徴はあらゆる場合を通じて破裂音性だとしなければならない。そうすると、次の四つの音素の弁別的特徴は

/t/	interrupted（破裂音）	/d/	mellow（軟か音）
/s/	continuant（摩擦音）	/z/	strident（きしみ音）

となり(27)、/t/ と /d/、/s/ と /z/ が互に関係のない音素となってしまう。それよりも、

/t/	mellow	/d/	mellow
/s/	strident	/z/	strident

と見て、「チ」「ツ」の子音はそれらとは別の破擦音音素 /c/ に該当すると見る方が良いというのが、私の意見である。こう解釈することにより始めて、たとえば私の方言における

[itteɴ]《一点》, [isseɴ]《一銭》, [ittseɴ]《一膳》

の如き対立も

/iɥteɴ/, /iɥseɴ/, /iɥceɴ/

と矛盾なく解釈することができる。このような音韻論的解釈は、情報理論からは、余分のものを含んでいて最善ではない、ということになるかも知れぬが、現代日本語の、問題の諸方言の音韻構造を記述するのに矛盾のない点で、「チ」「ツ」を /ti/, /tu/と解釈するよりは勝れている、というのが私の主張なのである。

なお、この /c/ を /t/ から分離するに当り、私のいう「環境同化の作業原則」は、次のようにして適用する。破裂的軟か音音素 /t/ と張唇前舌狭母音音素（浅明母音音素）/i/ と結合したモーラ /ti/ の /t/ に該当し得る単音は、口蓋化のあまりない舌尖の [t]（を例にとることとする）から、口蓋化のある舌

尖の［ʧ］を経て、完全に口蓋化された舌背の［ɕ］に至るまで色々のものがあり得る。即ち［i］に同化することの最も少ないものから、極度に同化したものに至るまで色々あり得るが、それらすべてに共通の点は、破裂的軟か音、即ち破裂してパッと［i］の位置へ急に移る点にある。然るに「チ」の子音である破擦音［ʦi］の場合は、破裂後も直ちに［i］の位置へ移らず、［ʃ］式のきしみ音を出すためのせばめの調音を経過してから母音へと移る。ところが、このきしみ音を出す調音は［i］の要求する所ではない。即ち、/t/にとって必要なのは「浅くて明るい」音色の破裂音を出すための閉鎖であり、/i/にとって必要なのは、舌尖を下の門歯附近に位置せしめ前舌面を硬口蓋に向って持上げそれとの間に或程度の管状のせばめを形作ることだから、このような閉鎖と［i］のための調音との間に、きしみ音を生ずる調音を必要としない。だから「チ」の子音［ʦi］に含まれているきしみ音は、/t/が/i/に同化して生じ得る音色以上のものである。従って、この［ʦi］は「タ」「テ」「ト」の子音［t］と同じ音素に該当すると認め難い、というのである。

「ツ」の場合もほぼ同様に説くことができる。

然るに「シ」の子音［ʃ］の場合は異なる。/si/というモーラの/s/に該当し得る単音は、口蓋化のあまりない舌端の［s］（を例にとることとする）から、口蓋化のある舌端の［ʃ］を経て、完全に口蓋化された舌背の［ɕ］に至るまで色々のものがあり得る。即ち［i］に同化することの最も少ないものから、極度に同化したものに至るまで色々あり得るが、それらすべてに共通の点は、「浅くて明るい」音色のきしみ音を生ずるための狭めのあることである。現代日本語の「シ」（例えば私自身の「シ」）の子音は、［ɕi］に極度に同化したものに近いが、［i］が要求する以上に舌端にくぼみができて、英語やフランス語の［ʃ］のように「深い」音色を生ずるようなことはない(28)。その他の調音的特徴も、［i］の要求する範囲内でそれに近い特徴を示しているに過ぎない。故にこの［ʃ］は/s/に該当すると見ることができる、と私は説くのである。

最後に注意しておきたいのは、ここに説いたことはすべて共時的現象に関することであるという点である。通時的音変化とは関係がない。［ʃ］について右のように説くことは、その前身が何であったかということとは無関係である。もと［s］だったものが後続の［i］に同化して［ʃ］になったのでもよければ、/s/に該当する単音は元すべて［ʃ］だったのが［a］［o］［u］［e］の前では［s］に変化したのに、［i］の前においてのみそれに引きとめられて［ʃ］として残っているのでもよい。過去のことは、この場合、関係がない。いずれにしても、現在の状態が右述のようであるという事実を我々は共時論的に問題にし、音韻論的解釈をしているのである。同様に、/i//u/は一般に/t/や/d/を通時的に破擦音化する（前者は更に口蓋化する）傾向がある。現に日本語の「チ」「ツ」の子音はそのような（通時的）破擦音化の結果生じたものである。それにも拘らず、共時的に見る時は、［i］は、破裂的軟か音［t］［d］が口蓋化し更に舌背音化することは要求しても、破擦音化することは要求しない。これらの事情に関し、浜田敦さんは大きい誤解をして居られると認められるが、浜田さんに対するお答は次回に執筆することとする。

註

1（40頁）「もっぱら」という言葉を使われたのは、mellowness と stridency とを弁別的特徴として含まないと考えられたものと解釈される。

2（40頁）亀井さんは、この /b/ と /ɸ/ の対立には、interruptedness 対 continuousness の「識別的特徴」が重加していると考えて居られる(国三54)。亀井さんが「識別的特徴」という術語を「弁別的特徴」と同じ意味に用いられることは、同氏の「『音韻』の概念は日本語に有用なりや」(『国文学攷』第十五号)という論文の一〇頁に明記されている。

3（41頁）interruptedness が /k/ /g/ の「識別的特徴」であったと考えて居られないとしても、ここの論旨には関係がない。

4（41頁）このことは、次のようにも説明できる。亀井さんは「/b/ と /ɸ/ との違いは /d/ と /s/ との違いに等しい」と考えられたことになるのだから、更に「/b/ と /ɸ/ との違いは /d/ と /t/ との違いに等しい」と考えると矛盾が生じる、と。

5（41頁）このように推定することは、これらの諸音素が、ここに問題とした特徴以外に弁別的特徴を持っていなかったと推定することではない。たとえば、右のほかに、/d/ /t/ と /z/ /s/ とは、ここに問題とした特徴（それはこれら四つの音素にとっては弁別的であったと考えられるが）に融合する弁別的特徴として interruptedness 対 continuousness を有していた蓋然性が大きい。それにも拘らず

/b/	/d/	/g/	/z/
/ɸ/	/t/	/k/	/s/

という相関関係があったとの推定は変更されない。

更にまた、/b, ɸ; g, k/ に対立するきしみ音音素がなかったと推定されるから、そのような場合にはこれらの音素の「軟か音性」は余分の特徴であって弁別的特徴ではないと Jakobson 教授は考えるようである。その場合でも、右の相関関係に関する推定は変更する必要がない。なぜなら /b/ /ɸ/ は少なくとも唇音（浅くて暗い音）という点で共通の弁別的特徴を有し、両者の違いは有声音対無声音の点にあるからである。念のために、このように考えた場合の弁別的特徴を表にして示すと（interrupted vs. continuant と mellow vs. strident とは融合するものとして）次のようになる。

	/b/	/ɸ/	/d/	/t/	/g/	/k/	/z/	/s/
interrupted	+	+						
mellow			+	+			−	−
continuant					+	+		
strident							+	+
compact	+	+			+	+		
diffuse	−	−	−	−	−	−	+	+
grave	+	+	+	+				
acute	−	−	−	−	+	+	−	−
voiced	+		+		+		+	
voiceless	−	+	−	+	−	+	−	+

右に用いた弁別的特徴を表わす術語はすべて Roman Jakobson 教授ら(Roman Jakobson, C. Gunnar M. Fant, Morris Halle: *Preliminaries to Speech Analysis*, Technical Report No. 13,

Acoustics Laboratory of the Massachusetts Institute of Technology, 第1回 1952年1月, 第2回同年5月。)の用語だが、これらの諸対立が存することについては私は教授らに同意する（それだから右に仮りに用いたのだ）けれども、用語そのものについても、特徴の音響学的定義についても、完全に賛成しているわけではない。たとえば、後述のように interrupted と continuant は abrupt と gradual に改めた方が誤解がないのではないかと思うし、mellow（後述）や compact, diffuse の定義についてもまだ疑問がある。しかし私は、教授の compact, diffuse; grave, acute にそのままあたる「深さ」「浅さ」「暗さ」「明るさ」（いずれも仮りの名称）という特徴は認められると思うので、その音響学的性質を研究中である。山本謙吾氏と研究中の満洲語口語には、次のような音素の対立がある。これに反し、日本語では、深音に明暗の対立が無いものと認められる。

満洲口語

	深音	浅音
暗音	q	p
明音	k	t

日本語

	深音	浅音
	k	p
	t	

6（41頁）たとえば「アブナイ」の「ブ」の子音は自然な発音では摩擦音で、破裂音を発音すると不自然になる。/g/のほかに/g/を有しない方言では、母音間で/g/に該当する子音が摩擦音であることが多い。

7（41頁）Jakobson 教授らは

> In the case of constrictives, mellowness is a consequence of a limitation upon the randomness in energy vs. frequency distribution.
>
> In the case of stops, mellowness is achieved by a limitation upon the randomness of the phase.

と定義している（*Preliminaries*, pp. 23, 24.）。[*Fundamentals*.（後述）の31頁では、strident と mellow の対立は、音響的には higher intensity noise vs. lower intensity noise としている。]たしかに［θ］と［s］は持続部そのものの音色も違っている。しかし mellow sounds と呼ばれるものに共通の特徴は音色がきしみ的でないという点のほかに、わたり的である——摩擦音においては摩擦的噪音を出す調音を、少なくとも持続しようとしない——という点、しかもわたり方が急であるほど良い点、にもあるのではないか。アメリカ英語の話し手で、/θ/に該当する単音として破裂で始まる［θ］を有する個人は稀ではないから、Jakobson 教授らのように、英語の/θ/を mellow constrictive（即ち、mellow continuant）と定義することはできないのではないか。英語の/t/と/θ/との対立にとっては、調音点の相違による音色の差異と、［θ］の少なくとも出わたりが摩擦音的である点が弁別的であり、/s/対/θ/の弁別的特徴は、きしみ音対軟かい音で、調音点の相違による音色の差異もそれに重加しているのではないか。研究を要する。Jakobson 教授らのいう mellow と continuant の本質に関しては更に研

究する余地があると思う。

因みに、いわゆる破裂音が、発話の末位などで、英語などでも、屢々破裂なしで発音されるので、外破音（explosive）、内破音（implosive）など種々の破音（plosive）に共通の持続部の閉鎖がこれらの音にとって本質的な部分であるように説かれることがあるが（「閉鎖音」という名称はそういう見解に由来する）、発話の末位などの破裂のない破音は、その位置がそういう発音を強いるからであり、入りわたりの内破音によって破裂音の存在が認知されるから破裂なしですまされるのではないか。（これに反し、破擦音では発話末位でも出わたりの発音が要求される。）故に、破裂音にとって本質的な部分は出わたりの破裂的噪音であると考えることもでき、従って、「閉鎖音」「破音」などという名称より「破裂音」という名称の方がよいとすることもできる。

音節末音の内破音（出わたりの破裂のない破音）が、朝鮮語・シナ語・安南語などにおいて、音節頭音の破裂音（外破音）とは異なる音素に該当すると解釈し得ることについては、前回（「国語学」第二十二輯）の拙稿100頁参照。アイヌ語北海道方言は、音節頭位にも音節末位にも三種の破音［p, t, k］を有し、かつそれ以外の破音を有しない。だから、音節末位の破音が内破音であるにも拘らず、それらは音節頭位の外破音［p, t, k］とそれぞれ同一の音素に該当するとするのが音韻論の常識である。それにもかかわらず、音節末位の［p, t, k］が、内破音であるが故に、音節頭位の外破音［p, t, k］から遠ざかっていることは、カラフト（のライチシカなどの）方言で北海道方言のこれら三種の内破音に対応する音素が／h／（ただし／i／の後では／s／）である事実からも、察せられる。また／c／の前の前硬口蓋内破音を／t／に該当すると解釈せざるを得ないところにも無理があることに注意すべきである。

なお、Jakobson 教授らは interrupted consonants と continuant consonants とを、

> The abrupt onset distinguishes the interrupted consonants (stops) from the continuant consonants (constrictives).
>
> The onset of constrictives is gradual.

と定義して居るから（21頁）、特徴の名称としては abrupt vs. gradual の方が誤解をまねくおそれが少ないのではないか。［但し、*Fundamentals* では discontinuous 対 continuous と改められている］。

8 （42頁）喜界島阿伝方言、沖縄島南端近くの久高島方言に母音間でこの種の無声両唇音が現れる。しかし発話の頭位ではやはり弱い破裂音［p］が聞えるが、殊に久高島のは弱い。

9 （42頁）梅田博之「訓蒙字会における中期朝鮮語の音韻体系について」（東京大学文学部言語学科昭和二十九年卒業論文）によれば、中期朝鮮語には／b／（無気音）、／p／（有気音）、／m／の三つの唇音音素があっただけで／f／や／ɸ／はなかった。現代朝鮮語にも／f／や／ɸ／はない。

10 （42頁）両唇の調音がひどくゆるめば軟か音性の特徴も失われるわけだが、／ɸ／の目標的特徴（45頁参照）が無声の両唇軟か音であったとすれば、はっきりした而も自然な発音では、軟か音の［ɸ］が現れたと考えられる。

11 (42頁) Louis Hjelmslev : *Prolegomena to a Theory of Language* (Baltimore, 1953), §§ 14, 15.

B. Siertsema : *A Study of Glossematics*(The Hague, 1955), Introduction I.

ソ連邦でも Hjelmslev の学説に対する強い反対がある。O. S. Axmanova : *Fonologija* (Moskva, 1954), p. 16, ff.

なお、平凡社「世界大百科事典」の「げんご」(言語)の項参照。

12 (43頁) 服部四郎「音韻論と正書法」(研究社、一九五一年)、71頁以下。

13 (43頁) *The Phoneme : Its Nature and Use* (Cambridge, 1950), § 31.

14 (43頁) 服部四郎「音声学」(岩波全書、一九五四年第三刷)、49頁、55頁。

15 (43頁) たとえば、拙著「音韻論と正書法」98頁。

16 (43頁) 一例を挙げれば、H. A. Gleason, Jr. *An Introduction to Descriptive Linguistics*, New York, 1955 も、同一音素に属するすべての単音は「或程度、音声的に類似していなければならない」(§ 2. 21) としているに過ぎないので、アメリカ英語の [bɔ:] law などの [:] と、[bɔ:l] hall などの [h] とを同一の /h/ に属せしめる説に対して、夫々別の音素 /ɔ/ と /h/ に分属せしめる説を出しているにもかかわらず、ただ「この二者を別の音素と見る方が、よりよい解決であると、私は考える」(§ 3. 22) と述べるだけで、何らの理由を示し得ない。私のいう「環境同化の作業原則」を適用すれば、或音が音節の頭では無声になり、その末尾では有声となることは、一般音声学的には勿論、英語の特殊事情としても、説明できないから、当然両者は別の音素に該当するとしなければならない。「音韻論と正書法」108頁以下参照。

なお、Kenneth L. Pike : *Phonemics, A Technique for Reducing Languages to Writing*, Ann Arbor, 1947 はその表題の示す如く、音韻論の大きな目的を表記法の確立にあるとしている点で、音韻論の目的は言語の音韻構造を明かにすることであるとする私の考えと異なるのが一つの大きい原因で、音韻論的解釈の手順においても結論においても、私の説と異なる点が少なくないが、58頁の「音はその環境によって改変される傾向がある」という「第一前提」そのものは、私のいう環境同化の作業原則と、結局において、同じ考え方を基礎としていると言えよう。ただし私の思想は、日本語の「タ行音」「サ行音」の音韻論的解釈から発展したもので、後になって Pike に同じような説のあることを知ったのであった。

17 (43頁) *Language*, New York, 1933, 1950², § 5.5.

18 (43頁) Roman Jakobson and Morris Halle : *Fundamentals of Language*, 'S-Gravenhage, 1956, p. 13. この本は本稿を一通り書き終えたのちに同教授より寄贈を受けたので、この論文の他の場所では引用し得るとは限らなかった。

19 (43頁) N. S. Trubetzkoy も次のように定義している。「問題の言語の観点から、更に小さいそして継起的な音韻的単位に分析できないこれらの音韻的単位を我々は音素と呼ぶ。」(*Principes de Phonologie*, Paris, 1949, p. 37) 「音素とは一つの音的心像 (une image phonique) を伴う所の、音韻的に問題になる諸特徴の総体 (la somme des particularités phonologiquement

pertinentes) である。」(同書, p. 40)

20 (44頁) *Fundamentals*, p. 14.

21 (44頁) 現在までに発見されたものは、全部で十二対に過ぎないという。*Fundamentals*, §3.6.

22 (44頁) Jakobson 教授は、この手順により、Y. R. Chao 教授のいう「音韻論的解決の非単一性」(Non-uniqueness of phonemic solutions) を克服 (overcome) することができると考えているが、単音に分割する方法の非単一性が克服できないから、厳密にいうと結局それは不可能ではなかろうか。Chao 教授の説はアメリカの学界に大きな影響を与え、音韻論者の個人的好みに従って、英語の h と ng とが同一音素に属すると見做しても差支えないと説く者さえある。それほどではないにしても、〃音素分析〃が、言語の音韻構造の探求ではなく、最も簡潔な、或いは或目的に最も適当な表記法の探求に過ぎない観を呈することが多い。Zellig S. Harris: *Methods in Structural Linguistics*, Chicago, 1951 がその良い例である。ここに到ると、結果において Hjelmslev の説に近いものとなる。私の意見では、「音韻論的解釈は単一ではあり得ない」という作業仮説よりも、「最善の音韻論的解釈は一つしかない」という作業仮説の方が、実践的に有利であると思う。勿論、その音韻論的解釈は、その言語の音韻構造を明かにすることを目的とするものであって、その他の如何なること (音声タイプライターの作成を含む) をも目的とするものではない。

23 (44頁) 私は以前に /ji/, /wi/, /jwi/, /i/, /i/ という解釈をとったが、半母音 /j/ /w/ の代りに副母音 /i/ /u/ を立てるべきではないかと考えるようになった。更に研究を要する。

24 (45頁) 同雑誌の38頁の表には、そのほかにも首肯し難い点があるが、40頁の表で訂正されている。

25 (45頁) 私は以前にこれを弁別的特徴と呼んだが、Jakobson 教授の用例に従えば、「弁別的特徴」という術語をこのように用いることはできない。

26 (46頁) 同様に、同時代の日本語の /d/ /g/ が軽い鼻音化を伴ったとすれば、その特徴も非相関的特徴と見なければならない。

27 (50頁) Jakobson 教授は、/z/ を摩擦的きしみ音と考えて居られるのではないか、とも疑われる。

28 (51頁) アメリカに三十年も住む日本人の日本語の [ɲ] が、英語の /ś/ (=[ɲ]) の影響を受けて「深い」音色を帯びるに至っているのを観察したことがある。このような日本語の [ɲ] は、「サ」などの /s/ と異なる音素 /ś/ に該当すると言わなければならない。(未完)

—東京大学教授—